

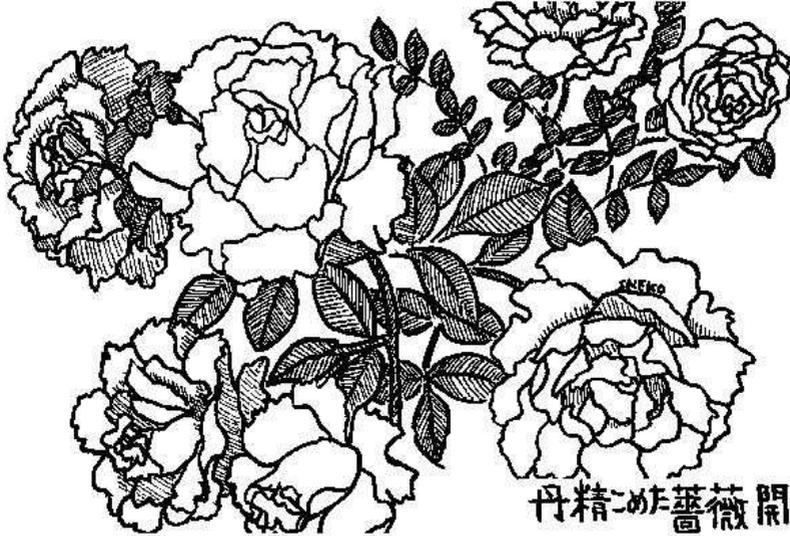
2012年6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2012年6月
第92号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



丹精こめ薔薇開く

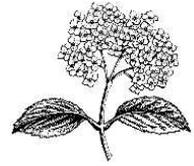
目 次

漢点字の散歩 (30) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (88) (山内 薫)	4
相互理解促進のための短期集中学習の勧め (村田忠禧) ..	9
漢点字訳書紹介『寺山修司歌集』(岡田剛嗣)	11
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	14
東京漢点字学習会報告 (菅野良之)	19
漢文のページ	21
漢点字講習用テキスト(初級編・第32回)	24
ご報告とご案内	25
編集後記 (木下和久)	27

漢点字の散歩（三十）

岡田 剛嗣

吉本隆明氏



扉

東京鍼灸師岡田健嗣たけしさんは生まれつき強度の弱視で、失明したのは19歳のとき。盲学校では本と縁遠い生活を送った。大学の読書会で友人が、吉本隆明『言語にとって美とはなにか』を読み聞かせてくれたとき、衝撃をうける。生まれて初めて思想や文学にじかに触れる思いがした。以来、吉本の言葉は岡田さんの心をとらえつづける。

残念ながら吉本の著書は点訳も音訳も少ない。岡田さんはいま知人に『初期歌謡論』の音訳を頼んでいる。「喪失感は大きいけれど、読み継いでゆきたいから」。漢字を表現できる点字「川上漢点字」の実践者でもある。吉本隆明には、62歳のこんな読者もいる。
(白石明彦)

(朝日新聞 2012年5月13日)

本紙前号に掲載した拙文が、朝日新聞の記者・白石明彦様のお目に止まり、右の記事となった。私どもの置かれている状況を直視して下さる視線に、心よりの感謝を捧げたい。

吉本隆明氏について私が何かを書くとするれば、これが最初で最後になるだろう、前号ではそのようにして書かせていただいた。そこでもう一度機会がいただけたと捉えて、もう一つだけ書かせていただくことにした。

氏との関連で漢点字について述べれば、こういうことがあった。

現在は著作権法が改訂されてその必要はなくなつたが、パソコン点訳する際は著作権者の許諾を得る必要のあったころだったと思う。そんな要件で、著作権者の吉本氏にお願いのお手紙を差し上げたことがあった。許諾願いとともに、私が〈漢点字〉の点訳活動を行っていることを書き添えた。折り返し点訳を諾されたお葉書を落手した。

疎覚えだがそこに、「あなたのやっていることは大変困難なことなんだ。息長く頑張つて欲しい。」とい

う意味の文があった。(この葉書、どこかにしまつてあるはずだが、現在は見つからずにいる。)

当時はそれほどのはあるまい、と高を括つていた。だが段々実態が分かつてきた。視覚障害者もパソコンを使えるようになって、肉筆とは行かずとも、普通の文字が書けるようになった。私もその恩恵に浴している一人である。つまりその喜びは言葉にできないほどのもので、その限りではこの文明の力に、掛け値なしの恩義を感じたものだった。勿論ハードウェアよりもなお、それに対応したソフトウェアの開発の労には、感謝してもし切れないのである。

しかしそこで気づかされたことがあった。それというのも、漢点字使用者と自称する人たちが、徐々に漢点字から遠ざかっているのであった。どうして漢点字を使わないのか(?)と尋ねると、「もう漢点字はいらない。パソコンでローマ字変換すれば文字は書けるのだから。」という答えが返ってきた。これには驚いた。「そうか、これが吉本さんの言われる困難なんだ。」、やつと気づかされた。

その後、そのように見ていると、一見漢点字に熱心

に取り組んでいるように見える人たちも、(盲学校の先生方を含めて)あまり本を読んでいる様子のないことが分かつてきた。一般に読書に対するニーズのあり方というのは、読書の量に依じて何らかの深まりを見せるものであるが、どうもそのような様子がないのである。勿論これは私の主観に過ぎないかもしれないし、客観的なデータはない。一般にもこのような現象に客観的なデータはないに違いない。ただ読書とは、書物という峰に挑みながら、一步一步を進めるものであつて、高峰に挑むだけ、読み方は深まるものだから、そういう認識があるだけなのである。

漢点字の普及が遅々として進まない主な理由は、どうやらこの辺にある、今はそう捉えている。漢点字使用者がこうなのだから、未使用者は追つて知るべしの場合なのであろう。そして漢点字しか触読に耐えうる漢字体系の触読文字は存在しないことを見れば、視覚障害者の読書環境に知的環境の位置が見えてきそうに思われる。

右の記事にもあるように、私は今、吉本氏の『初期歌謡論』に挑もうと思つている。その冒頭を紹介する

と、

《神話の物語や歌謡には、物語ること歌うことが、実際の行為と区別できなかった時代が埋もれている。

それを探すには、伝えられた物語や歌謡から、後につけくわえられたもの、編者の意図が強調されすぎた箇所、また、編集のさい新しく創りあげられたものを削りおとしてゆかなくてはならない。まずはじめに、歌謡から地の物語とかかわりのある詩句を排除しても、

独立の歌謡としての姿をもちうるばあいは、その種の詩句は削りおとしてみなければならぬ。なぜならば、流布されていた任意の歌謡が、神話の物語に適合する形に改められて、挿入されたという可能性がかんがえられるからである。(中略)／この種の操作がどうして許されるのか。説得力のある根拠などありやうがない。あるとすれば、律文や韻文や歌は語りと独立に先行しうるといふことだけである。それ以外の根拠をもとめるとすれば、『古事記』や『日本書紀』の神話が、複合的であり、また多層的でありしかも、編者の意図を無視するにはあまりに記述が新しすぎるた

め、どんな改作も作意も入り込むことができたにちがいないと思わせるところにある。この点は概観しておく必要がある。》

つまり記紀歌謡は、その編者の意図を排除して歌謡だけを取り出すために、地の文に関わりのある語句を削り落としてみることができるとは、その作業から、記紀とは独立した歌謡の姿が現れ出てくるはずで、そこに歌謡の古層を見出せるはずだ、というのである。

この方法は、私たちには極めて馴染みの深いものである。しかし容易く達成できるものではない。氏は『言語にとつて美とは何か』のなかで繰り返し、「読書百遍」を説いておられた。百回読み返せば、自ずとその内容が理解できるといふことだが、氏は「表現転位論」で、文学作品のなかで、繰り返し読み込むことで、作者の表現したいところはどこかが見えてくると言われている。その方法を記紀歌謡に応用したのが、右の記述に違いない。

こうして見ると、読書という行為が、どれほどに能動的なものが分かる。私が氏の本から受けた衝撃と

は、この能動性であったにちがいない。氏はある書物を読んで見せる。それをまた表現して下さる。私たちはそれをまた読む。だがそこで、あなた独自の何らかの方法がなければこの本は読めないよ、と突き放される。しかし突き放されたと見えるだけで、いつでも受け入れ体制は整っておられるようだ。

氏の逝去の後、多くの識者が追悼文を書かれていた。そのなかで私が最も共感を覚えたのは、作家の高橋源一郎氏の文であった。高橋氏は、(思想は普通、前の姿しか見せないものだが)「吉本さんは、思想の『後ろ姿』を見せることのできる人だった。」と述べておられる。そして、「吉本さんの、生涯のメッセージは『きみならひとりでもやれる』であり、『おれが前にいる』だったと思う。吉本さんが亡くなり、ぼくたちは、ほんとうにひとりになったのだ。」と結んでおられる。

視覚障害者が「読書百遍」して、読書の方法を手に入れられるのは、どれほど先になるのであろうか？ 私たちはそのために、何をしなければならぬのであろうか？

点字から識字までの距離(八十八)

野馬追文庫(南相馬への支援)(六)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

実は、昨年の暮からWさんとの連絡が途絶えている。葛飾図書館の知り合いに問い合わせなどしたが体調を壊しているようで、一切の連絡が取れないまま現在に至っている。現地報告という要を失って時折寄せられるRさんのメールが唯一の手がかりとなっていた。一日も早いWさんの復帰を望んでいるが、毎月一日に本を定期的に送り続けねばならず、何とか福島の声を反映しつつこの事業を続けていければと考えている。

そんな折、前回レポートしたKさんの福島での講習会に参加して下さった本宮市の図書館に勤務するYさんに、Kさんが白羽の矢を立てた。

「バリアフリー絵本展などでお世話になり、自分の考えをすっかり持っておられる福島県本宮市立図書館のYさんという児童図書館員の方にご意見をうかがわせてほしいとお願いしてみました。Wさんの才能は稀有で、戻ってくださることを切望しますが、しばらくは、何とか現地の声にも触れる条件を持ちながら彼の

意思をつないでいければと思います。彼女もまた大変誠実で、自分の意思と考えのある図書館員です。三月一日直後は、心配でならないほど動揺し苦しんでいた被災者のお一人でもあります。」

KさんとYさんの間には定期的なメールの交換があったようで、Kさんが今までの経緯を説明した上で、ある絵本の評価について意見をYさんに尋ねたのだった。その絵本というのは『あさになつたのでまどをあけますよ』（荒井良二著 偕成社）で、絵本作家が今回の震災を期に描いた絵本である。この絵本を南相馬の仮設住宅に送る候補にするかどうかということになり、Kさんから次のような意見が寄せられた。

「私もこの絵本は素晴らしい絵本だと思います。宮城や岩手の人には躊躇なくお送りしますが、土や山や風景そのものをそこにあつてももう戻れない、奪われてしまった南相馬の仮設に住む人たちには……。南相馬は近隣の警戒区域からの移住者が多い）迷ってしまいます。」

私はどちらかといえば推薦する立場で下記のような印象をメールした。

「いろいろな状況や立場におかれている人それぞれが享受して欲しい感覚（ランボーの初期の詩にサンサン

オンというのがあつて、その感覚に近いもの）をこの絵本は持っているように思いました。『自分たちの家や風景を思い出す』というようなことではなく、今のあるがままの状況の中でいろいろな情景をそれぞれイメージできるのではないでしょうか。」

これに対してYさんは次のような意見を寄せられた。

「これはちよつと難しいのでは？というのが第一印象です。内容はさておき、対象者は？と考えたときに、これは絵本の形をとっていますが、この絵本の本当の意味を幼い子どもが理解できるでしょうか？ということとを最初に危惧しました。福島だからということではありません。どこにいても自分の住んでる町や村の良さをいつまでも持ち続ける感覚というのは、原発事故後も南相馬の人も変わらないと思います。ですから、大人が読むにはいろいろと考えさせられる本なのでしようが、子ども達にそれがわかるでしょうか？」

また、「私の個人的意見だけではなんなので、図書館でボランティアをしていただいているかたにあの絵本を見考にしてください。この絵本に書いてあることは、今福島にいる大人・子どもすべての心のうちにあること

です。この本を読んでいるとその苦しい心の内を引きずり出されるような感じがして、自分はこの本を子どもには読んであげられない。今読みながらでも涙が出そうになった。こうした絵本は、福島でよりもっと首都圏の方にみてもらい、被災地の人がこんなふうに感じていると理解してもらおう方に使ってほしいと思う。福島の子どもには、読んでいて楽しくなる、子どもも声を出して笑えるような希望のある絵本の方がよいのではないか。以上です。彼女は読むとすぐにこれは震災の本だということが、わかったようです。作者の荒井さんの本もよく読んでいて、今回は震災の本なのでいつもの荒井さんの本らしくないシリアスな本です。ねといっていました。でも、子どもに読んであげるなら、いつもの荒井さんの絵本のような笑える楽しい内容がよいともいっていました。」

結局この絵本は候補から外すことになったが、Yさんはこの支援プロジェクトに参加して下さることになり、次のようなメールを下された。

「私は1年前のあの震災のときにふとグリムの昔話『忠臣ヨハネス』というお話がふと頭をよぎりました。ご存知かもしれませんが、主人公の忠臣ヨハネスがあらゆる苦難を引き受けて、恩義ある父王の遺言を

守り、息子の王子を助けてゆく話です。後半では、自分の命と王子の命とを秤にかけなければならぬ究極の選択を余儀なくされる過酷なお話です。あの未曾有の大震災の中にいて、あの話を思い出すことができず、私自身が、人間としての尊厳を守ることができたのではないかと今になると振り返ることができます。人間は、苦難の中にあるとつい憎しみや恐怖で我を忘れてしまいますが、困難をあえて引き受ける覚悟をもつことが必要だと忠臣ヨハネスは私に言ってくれたような気がします。このような経験からも、私は人は自然に物語の中にある力を自分の生きる糧として生きることができると考えています。本やお話の中にある力、そして子ども達の力を信じて頑張りましょう。」

そこで今までの経緯や南相馬への支援の原稿を送って読んでいただいた。しばらくして届いた手紙には次のように記してあった。

「同じ福島といっても、私の住む中通り地方と南相馬のある浜通り地方では状況が全く異なると思います。ただ、福島第一原発事故により、これまでの生活や価値観が一変したことは間違いありません。ここ本宮町でも、母と子だけが県外へ避難して、バラバラになっている家族がいます。一見何の影響もないように見え

でも、これからの未来を考えた上で、福島に残った子ども達にも長期にわたる苦難がついて回るかもしれない。このような負の遺産を背負うであろう子ども達に大人が何かできることがあるとすれば、『苦難を乗り越える力』育むしかありません。私は本がその力を与えてくれるものと思っています。そうした意味でも『忠臣ヨハネス』が頭をよぎった訳です。力不足ではありますが、少しでもお役に立ちたいと思います。よろしくお願いします。」

このようにして新たな仲間が増えたのだった。ところで、野馬追文庫という名称を考えた時から何かロゴが欲しいという話があったのだが、Kさんが候補を見つけて下さった。

「野馬追はテレビでしか見たことがないのですが、イメージが乾千恵さんの書『馬』にぴったりくるのです。福音館書店の『月人石』の馬という字を時間があるときに見てください。この本二〇一年世界のバリア



野馬追文庫の表紙

フリー絵本展に入っていますので、乾さんとも連絡が取れます。」

その絵本『月人石 乾千恵の書の絵本』（乾千恵・書 谷川俊太郎・文 川島敏生・写真 福音館書店二〇〇三）の表紙は乾さんが左手に太い筆を持ち、左から右に向かって文字を書く写真が使われている。乾さんは右手がうまく使えないために左手で書く書家で、すでに何冊かの本を出版されている。この横長の絵本は、見開きの左ページに乾さんの書、右ページに川島敏生の写真が配され、その写真に谷川俊太郎の詩が載っている。件の馬の場面には四本足でしっかりと大地を踏みしめたような烈火の上に疾走するたてがみのような馬の三画面と四画面目が印象的な乾さんの「馬」という書があり、右ページには横長の画面一杯に、はみ出すように走る馬の写真が載り、「いのちははしる どこまでも」という詩が印刷されている。

「乾千恵さんは、ユニークな書をかいてきました。「馬」であれば馬が疾走するような文字になり、「遊」であれば人々が楽しげに踊っている文字になり、「山」であれば樹木の葉ずれや鳥の囀りが聞こえる。「鼻」であれば目の輝きと風の音が聞こえます。「月」は笑い、「石」はしゃべり、「音」は音楽が聞

こえていました。」（司修『乾千恵画文集 7つのピ
アソラ』（岩波書店 二〇〇六）に寄せて）という表
現がびったりで、この馬の字を使わない手はないと思
わせるのだった。

この馬という書をバリアフリー絵本展などでKさん
とつながりのある福島市にある「デザインングマーブ
ル」という会社に依頼してデザインを考えて頂いた。
いくつかの候補を検討した結果決まったのが図のよう
なシールである。幸い書家の乾さんからも福音館書店
からも使用許諾をもらえることになった。シールは本
に貼る三センチ×四センチの小さいものと包装に貼る
十センチ四方の中くらいのもの、そして箱に貼る二一
センチ四方の大きいものの三種類作成された。

五月には紙芝居の『へっこきよめさま』（水谷章三
脚本、藤田勝治絵、童心社）と野馬追文庫のロゴに
用いた『月人石一乾千恵の書の絵本』の二冊にそれぞ
れ野馬追文庫のシールを貼って送った。それに対して
Rさんから下記のようなメールが届いた。

「ただ今、野馬追文庫が届きました。野馬追のロゴ、
とても素敵ですね。」雄大な力”を感じます。サロン
の時でも皆さんにお話したいと思います。ありがとうございます
ございました。R」

ちなみに四月に送った本はYさんから推薦のあった

『わたしとあそんで』（マリー・ホール・エッツ作・
絵、与田準一訳、福音館書店）と『みどりいろのた
ね』（たかどの ほうこ作、太田大八絵、福音館書
店）の二冊、六月は『おじさんのかさ』（佐野洋子作
・絵、講談社）と『シャーロットのおくりもの』（E
・B・ホワイト作、ガース・ウィリアムズ絵、さくま
ゆみこ訳、あすなろ書房）の二冊を送った。この時
点で仮設住宅は三四箇所が増え、六月分は三四冊ずつ
送り、増えた六箇所には五月に送った紙芝居の『へっ
こきよめさま』の他、エリック・カールの寄贈絵本九
冊の「カールさんセット」を取りあえず送る事になっ
た。

紙芝居の『へっこきよめさま』を新たな仮設住宅に
送ったのは、KさんとRさんの次のような電話でのや
りどりの報告があったからだ。「五月分は馬のロゴが
新しくなったので、それをサロンで紹介しながら、袋
から本を取り出して読んでくださったようで、とても
楽しい紙芝居ですねとRさんの声が弾んでいました。

サロンでも楽しめたということですよ。うれしいで
すね。楽しいお話がいいですというRさんの言葉でし
た。朝の忙しい時間に電話してしまいました。いろ
いろとお話が聞けて参考になりました。ぶれずに、よ
い本を送り続けること、改めてそう思っています。」

相互理解促進のための

短期集中学習の勧め

村田忠禧（むらた ただよし）

以下は、元横浜国立大学教授・村田忠禧先生からいただいた原稿です。同学社（TONGXUE）は、中国語の教科書を製作している出版社で、そこにご寄稿になったものです。村田先生は、長年本会を側面から支えて下さっておられます。現在は大学を定年退職されて、名誉教授として後進のご指導に当たっておられる他、他大学にも講座を開設されておられます。また放送大学の神奈川学習センターで、面接指導の労を執っておられます。ここにありますように先生は、日中の学生の交換を通して、文化交流の促進にご尽力下さっております。よい実を結ばれんことを祈り申し上げます。大変ありがとうございます。

岡田

中国の存在感が高まる一方、日本の政治的、経済的

地盤の沈下傾向が指摘されて久しい。将来を担う若者の内向き志向はグローバル化時代にふさわしくない。中国語履修者の増大は、必ずしも中国への留学者数の増大に結びついていない。それどころか中国語を選択しながら中国に関心を抱かない学生が増える一方である。しかしこのような情況を作り出している要因は学生たちにあるわけではない。何のために外国語、とりわけ中国語を学ぶのか、中国語を学ぶことの大切さを自覚させる機会を提供せず、ただ卒業に必要として単位で学生を縛りつける日本の大学の外国語教育のあり方そのものに問題がある。

私は大学で中国語を教えるなかで、どうしたら学生たちに中国への関心を高めさせることができるか、自分なりの試行錯誤を重ねてきた。現行の教育体制には手をつけられない改善策に過ぎないが、一つの教育スタイルを見つけ出すことができた。それは通常の大学での学習と現地中国での短期集中的学習とを循環的に行なうもので、現実の中国を体験する機会を提供することを通して、学ぶ意欲を喚起し、発展させる方法である。以下にその概要を紹介する。

対象者は初級学習者、つまり基本的に一年生とする。なにごと最初が肝心である。学生交流と社会見

学に重点を置いた研修旅行も実施したが、語学学習に重点を置いたほうが発展性、将来性がある。学生自身に問い合わせてみても、語学力レベルアップを望む意見のほうが圧倒的に多かった。それだけ学びたいという意欲ある学生たちがいるのだ。実際には初級学習者向けプログラムとともに、中級レベルの学生をも対象にした集中授業も並行して実施している。しかしそこからは自主的学習と位置づけている。そこまで手が回らない、というのが正直なところ。初級については集中授業の形式をとり、夏休みの3週間、中国の大学で午前中みっちり中国人教師に教えてもらい、最後に本学の教員が試験を実施する。及第点に達した学生は秋学期から、通常なら翌年度春学期に学ぶ中級の履修が可能となる。つまり夏休みを含む半期で一年分の授業を受講できるという学習スタイルである。

春休みにもやはり3週間、中国の大学での集中的学習を実施する。実施校は夏休みとは異なる大学とし、中国の多様さを実感してもらおう。また春の集中授業は履修単位にはカウントしない。夏の集中授業を受けた学生で引き続き春の集中授業にも参加するものもあるし、初参加のもの、また三回目以上になるリピーターもいる。したがって学習レベルに応じたクラスを複数開

設けてもらうことになる。いずれにせよ日本の大学での通常の学習と現地中国での集中的学習の組み合わせは非常に効果的である。

この中国語集中学習プログラムにはもう一つの特徴がある。それは中国側実施協力校には日本語科がある大学を選んでいくことだ。午前中は中国人教員から中国語を学ぶとともに、午後には日本語を学ぶ中国人学生との相互学習、さらには共通テーマ（たとえば自分の故郷）を分かりやすく紹介しあう交流活動を行なっている。中国側にとっても日本の若者がまとまってやってくることで交流できることは歓迎すべきことなのである。企業見学をも含む社会見学を行い、実際の中国を自分自身の眼で体験してもらおう。彼らの中国イメージが大きく変わることは間違いないのである。われわれ日本側教員も、学生の中国滞在中に順繰りに訪申し、学生たちの学習状況を把握するとともに、中国側の授業への協力や講演を行なう。学生とともに教員の相互交流をも実施しているのである。

今年度から新しい制度として、日本学生支援機構による「留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）」がスタートした。1カ月以内の相互の学生交流活動に参加する学生に8万円の奨学金が支給

される。「日本と中国とのハイブリッド型教育による人材育成プログラム」を申請し、認められ、実施中である。この支援制度でとりわけ歓迎すべきことは、これまででは日本側の派遣のみであったのが、中国側からの派遣受入れが可能になったことである。このためわれわれがお世話になる大学の学生たちを、日本に招いてお世話することができている。中国からの来日学生にたいしては、語学学習よりも日本社会を体験することを重視したプログラムを実施している。これにより相互交流の良性循環現象が発生しつつある。しかも中国側教員に引率の役割を担ってもらうことで、教員研修にもなるし、今後の双方の教育・研究面での大学間の協力関係が発展しつつある。

解決すべき課題もいろいろある。宿泊費や渡航費の敷居が低くなれば、奨学金に依存せず、それぞれ自力による交流ができるようになるだろう。そのほうがはるかに持続的で発展的な交流が可能になるだろう。この面で政府や企業の積極的措置・支援を呼びかけた。

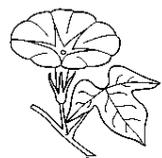
同出版社 『TONGXUE』43号掲載

2012年2月より

漢点字訳書紹介

『寺山修司歌集』

岡田 健嗣



二〇一一年度に横浜市中央図書館へ納入した漢点字書、『寺山修司歌集』をご紹介します。

寺山修司著『寺山修司歌集』

(国文社、現代歌人文庫③、一九八三年)

収録歌集は以下の通りです。『空には本』（昭和十三年）、『血と麦』（昭和三十七年）、『田園に死す』（昭和四十年）、『テーブルの上の荒野』（『寺山修司全歌集』より、昭和四十六年）

本書は、著者寺山修司氏が逝去した、一九八三年に刊行されたものです。

歌人から出発した寺山修司のプロフィールは、本書によると以下の通りです。

《一九三五年十二月十日、青森県弘前に生れる。一九五四年春早大入学、「チエホフ祭」五十首によって、第二回短歌研究新人賞を中城ふみ子に次いで受賞、一躍脚光を浴びる。同年冬、ネフローゼを発病、二十二歳までの四年間を、病床にありながら、歌作、

劇作、読書等に専念。以後六五年、最終歌集『田園に死す』刊行までの十年余り、短歌前衛を果敢にリードする。七一年、未刊歌集「テーブルの上の荒野」を『寺山修司全歌集』一卷の中に暴力的に収録し、歌の別れを告げる。一九八三年五月四日晴天、永遠に歌の訣れを告げる。》

このように著者寺山修司の歌人としての活動は、十年あまりと極めて短いものでした。しかしもたらしたインパクトは、計り知れないがあります。本会であえて寺山の歌集を漢点字訳することにしたのには、理由があります。それは、私を含めて視覚障害者の多くの者が、寺山の原点である短歌の創作とその発表と、それに伴う社会の揺れ動きから、否応なく隔てられてきたことにあります。彼の逝去から三〇年を迎えようとしている今日、その意味では、やっとこのような機会が訪れたか、そういう感慨を禁じ得ません。

インパクトの強さは、それを受け止める側からすれば、大きな動揺と感じられます。寺山の場合はそれが途方もなく強かった。そして大方の反応はそれに拒絶的だったようです。

本書に収録されている歌人論『アルカディアの魔王』で歌人の塚本邦雄氏は、

《芸術の諸ジャンルにはそれぞれを劃（かぎ）る不可視の牆壁があるらしく、それに妨げられずに自在に創造力を發揮した芸術家は、古来意外に数多くはない。本職が別にあつてその方も堪能だったとか、余技が神技に達したと言ふのならこの限りではなく、レオナルド・ダ・ヴィンチの自然科学に機械工学、アマデウス・ホフマンの法律とオペラ、（中略）例証に事欠くものではないが、ジャンルを言語芸術内の諸形式に限つてみても、傑れた評論家は拙劣な詩人であつたり、卓抜な俳人が愚昧な小説家であつたり、非凡の劇作家が悲惨な歌人であつたりする場合が、実例の枚挙は別として、通例であり得た。天は二物を与へるのに際して異常に吝（やぶさ）かであつたのだ。ところがその天が時によつては法外な大盤振舞をすることがあつて、その被饗応者を人人は天才とか超人とか呼びたがる。私も亦たとへば寺山修司をさう呼びたがった一人だし、今も呼ぶことをやめてはゐない。クロニクル風に言へば、俳句、短歌、詩劇、戯曲の順に、彼はその鬼才ぶりを示して来た。評論、散文詩、ルポルタージュ等はその各形式の背後で著者と形成されて来たし、派生的な産物シナリオ、歌謡等は戯曲、散文詩の中に含めて評価してよいだらう。そしてこれらはすべ

てその辺の文学青年の出来心的偶発作品ではなく、一

つ一つに傑作、代表作があり、厳然とした寺山修司独りの世界があり、その時代の典型たり得てゐる。私は彼を天才、鬼才と呼び、この後もさうあつてほしいと希望するが、同時に彼を秀才と呼んだことも冀（ねが）つたことも、まだ一度もない。秀才と呼ぶあの一度も地獄を見たことのない、渾沌も虚無も、不条理も反社会も、惑乱も耽溺も、わが事に非ずと姿勢を正した合理主義の化物のシンボルを、私はかつて信じたことも愛したこともない。（中略）／／今は昔、彼が作中人物通りではなかつたと毗を決して短歌のモラルを説いたり、用語に先蹤ありとあげつらつて、博覧ぶりを誇示した頑なな先輩たちを前に、途方に暮れつつ憫笑を以て応へてゐた寺山修司を、私はいたましい思ひにみちて想ひ出さねばならぬ。赤旗を売らずに売つたと歌つたことが、それ自体罪と呼び得た、このうとましい世界に、私は彼より先に住んで耐へてゐたのだつた。》（昭和庚戌（一九七〇））

つまり寺山は、決して好意的に迎えられるてはいませんでした。誤解でも無理解でもなくこういう困難さは、優れた表現者には必然なのでしようし、ある意味で寺山は、見事にそれに答え続けたと言えるのでしよ

う。

しかしこのような表現や応答は、受け止める能力を持たぬ者には、その存在さえ知り得なかつたのでした。能力の一つ、この分野では決定的な能力である〈文字〉を持ち得なかつた視覚障害者には、寺山のどうでもよい、ダーティな情報ばかりが耳を通して届きました。競馬やボクシングやアングラ芝居、視覚障害者にはそれらは、危険な領域、踏み入つてはいけな領域として伝わつてきて、あたかも寺山がそのような危険人物でもあると、了解されていたのでした。

しかしそんなわけはない、いつか、何とかして、寺山を漢点字で読みたい、私はずっとそう思つてきました。本書に収録されている歌集『田園に死す』の「跋」に寺山は、

《私の将来の志願は権力家でも小市民でもなかつた。映画スタアでも運動家でも、職業作家でもなかつた。／地球儀を見ながら私は「偉大な思想などにはならなくともいいから、偉大な質問になりたい」と思つていたのである。／／これは言わば私の質問の書である。／／こんど歌集をまとめながら、しみじみと思つたことは、ひどく素朴な感想だが、短歌は孤独な文学だ、ということである。／／だが、私が他人にも

伝統にもとらわれすぎず、自分の内的生活を志向できる強い（ユリシーズのような）精神を保とうと思つたら、この孤独さを大切にしなければいけない、と考えないわけにはいかないのだ。》と述べています。

最後に、塚本氏の抽出した寺山の作品からご紹介して、結びとします。

そら豆の殻一せいに鳴る夕べ

母につながるわれのソネット

日あたりて貧しきドアぞこつこつと

復活祭の卵を打つは

失ひし言葉かへさむ青空の

つめたき小鳥撃ち落とすとごと

智恵のみがもたせる詩を書きためて

暖かきかな林檎の空箱

ドン・コザツクの合唱は

花ふるごとし鍬はしづかに大きく振らむ

サ・セ・パリも悲歌にかぞへむ

酔ひどれの少年と一つのマントのなかに

かぶと虫の糸張るつかの間甦る

父の臉は二重なりしや

「東京漢点字羽化の会」

例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



第77回例会 2012年4月11日（水）13:30

15:30 場所 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

朝日新聞の「花をひろう」の記事は今までと同じ著者、高橋睦郎であるが、「季をひろう」というタイトル名に変わった。が、これまでのように入力、印刷、配布は引き続き行うので、何時ものように、4月14、21、28、5月5日の、当番の組み合わせを決めた。

新しい会員募集をするための講習会は、5月9日、5月23日、6月6日に向けて、ネット配信してくださったが、年度はじめなので、講座その他のお知らせが多く立てこんで、必要な人の目に留まらないようなので、もう少し増えるよう願っている。

講習会内容は前回と同様である。

締め切りは4月末日。

募集要項その他を再配信していただくことにした。

詳しいお問い合わせは岡田さんへ。

古語辞典については、やはり細かい打ち合わせをし

た。

羽化91号に東京の会員のお二人が原稿を書いてくださり、漢点字を学習していただける方も、お一人書いてくださった。

第78回例会(講習会一回目)2012年5月9日(水)

12:00～15:30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

いつものように、5月12、19、26、6月2日の「季をひろう」の入力担当グループを決めた。

5月16日の横浜での点字印刷をしていただく方を決めた。よろしくお願いいたします。

羽化91号をお配りした。

古語辞典の入力用原稿をそれぞれ持ち帰られた。

ボランティア保険の、新年度の再加入の手続きを会長にお願いした。

5月19日の学習会(61回目の予定)は、受講されている方のご都合が悪い方が多いので、この日はお休みにすることにした。

講習会は、岡田さんの漢点字とカナの点字の説明など、丁寧にした。

講習会二回目 2012年5月23日(水) ヒューマン

プラザ7階第一会議室、13:30～15:30

実際にパソコンで入力できるようにし、宿題を持ち帰られた。

* 予告

6月の例会(第79回)と講習会(3)

2012年6月6日(水) 13:30～15:30、後半は例会を含む。

6月の学習会(第61回) 2012年6月16日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室 18:30～20:30

7月の例会(第80回) 2012年7月11日(水)

ヒューマンプラザ7階第一会議室 13:30～15:30

7月の学習会(第62回) 2012年7月28日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室 18:30～20:30

8月の例会(第81回) 2012年8月8日(水)

ヒューマンプラザ7階第一会議室 13:30～15:30

8月の学習会(第63回) 2012年8月18日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室 18:30～20:30

9月の例会(第82回) 2012年9月12日(水)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 13 … 30 … 15 … 30

9月の学習会(第64回) 2012年9月22日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 18 … 30 … 20 … 30

10月の例会(第83回) 2012年10月10日(水)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 13 … 30 … 15 … 30

10月の学習会(第65回) 2012年10月20日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 18 … 30 … 20 … 30

わたくしごと

わたしの体形は小柄である。洋服を買うには、いわゆる「小さいサイズのコーナー」に行かなければ身体に合うサイズのものが見つからない。

Tシャツやセーターのようなものはそこで探している。

けれどもスーツなどはどこかわたしにはしっくりこない。袖が長すぎたり、どことなく見頃が大きすぎると。たとえば上着のボタンをかけるために、合わせようとすると、自然に、わたしの手はボタンの位置より深く重なり合ってしまった、そのずれに気づいてきちんとはめる。つまり、それほどその上着は、わたしには大きすぎるのである。

そんな訳でスーツなどの洋服は、幸運にも姉が洋裁を趣味にしているの、昔から、わたしの洋服はほとんど全部といていいほど姉が作ってくれている。

姉はプロではないけれど、わたしにとっては「お任せデザイナー」である。姉の仕事はわたしを連れて生地探しに行くことからはじまる。最近では生地屋さんがあめつきり減ってしまったので、お店はおおよそ決まっており、そのお店の「特売日」に焦点を合わせて二人のデート日を決める。二人とも結構忙しくしているので、デート日を合わせるのも難しい。それでも必要となるときは二人とも頑張つて日程を調整し、二人が落ち合うのに都合のよい地点で待ち合わせていそいそとお店へ繰り出す。反物はきれいに並んでいるので、並べられた順にさらりと探す。既に一着分に、あるいは反物の最後を適当にまとめられた端物が重なり合ったところでは、これまたわたしの手は活躍し、この手で自分に気に入った手触りのものを探す。ふくれ織り、ジャガード織り、綾織り、平(ひら)織り、ひとこし縮緬(ちりめん)風、ニット。サツカーやリップルにしてもいろいろな手触りのものがあり、選ぶのに迷うことはしばしばである。二人の楽しみはここが「生地探し」の醍醐味である。

生地選びはわたしの手と姉の目で、感触と、色と模様を吟味して探す。

わたしの生地選びに欠かせない条件は、冬物は「軽くて暖かくてチクチクしないもの」！夏物は「涼やかで軽やかで肌を刺激しないもの」！と決まっております。色と柄は姉の意見が優先される。なんととっても「決めて」の最大条件は「お値段」によるのも当然である。

一般にスカートと長袖の上着を作れる分量の生地を「着分（ちやくぶん）」として用意されているものから探したり、反物として並んでいるものから探すのは実に心楽しいものである。姉はなかなかの儉約家で、「着分」として用意されているものから、わたしのためにスカートと長袖の上着、それに半袖のものかベストまで作り出してくれる。これは、多分型紙を起こして、生地を裁断するとき、いかに無駄なく生地を生かすか工夫をしているのだろう。ときには共布でバッグまでそろえてしまう。これは手品のようだ。

もちろん必要な分量だけ計算して、反物から切って買うことも沢山ある。二人はおおよそのデザインは決めているが、多くは選んだ生地の雰囲気を決めている。姉は長年お世話になっている洋裁の先生にも相談に乗っていただいているという。

生地探しは実に楽しい。姉はお店のフロワ全体を見る。わたしは、めぼしい生地のありそうな一角に一人で立って、この手を生かして探す。色と柄については姉のチェックが入る。「それはあなたには色がきつすぎる」とか、「模様が似合わない」とか、たまには「色を変えればいいかな？」と言ったりする。「お買い得品」として積み上げられた生地の中の底の方から引っ張り出すようにして見つけ出して、「これは？」と聞くと、「あれ？どこから見つけたの？」と言われることもある。これは宝ものを探し出したようなもので、まあめつたにはない。生地探しは結構エネルギーを使うので大変だ。そのためにこれまでにも体力が無くなつて、なにも探し出せないこともあったり、「ハイ」な気分に乗せられて、一点に絞り込めずに、何枚も買ってしまうこともある。むろん姉は一度も無駄にしたことはないのです、結果として後悔したことはない。

もう30年ほど前のことになるが、わたしの生地探しの自慢話のような体験がある。あるデパートで例のごとく探していたとき、わたしはすっかり気に入って「ねえねえ、これは何色？」「クリーム色よ」「この生地をたっぷり使ってワンピースを作ったらすてきね」と言った。ややあって、「あなた、そんなものを

さわらないですよ」と姉が低い声で言った。「1メートル14万円よ」という。二人は店員が側へ来ないうちにそそくさと、でもさりげなくその場を離れた。姉が言うには、その生地は100パーセント絹なのだという。今思い出してもわくわくするほど柔らかく、手にしつとりとまとわりつくしなやかな感触で、優雅に着こなせたらすてきだな、と今だに忘れがたい一品である。

こんな風に、わたしの洋服作りには、わたしと姉の思い出の中にエピソードがたくさん詰まっている。

「小さいサイズのコーナー」へ立ち寄るのもデザインを決めるための目的のひとつでもあり、探検でもある。同じようにデパートの洋服売り場を歩くこともある。これは、姉が考えているデザインを具体的にわたしに教えるためで、「ペプラムというのは、こんなふうに着やスカートの裾を切り替えたりすることよ。いろいろなやりかたがあるけれどね」と言いながら、お人形に着せかけているものをそっと触らせてくれたりもする。ことなる素材の上下の組み合わせ、ブラウスと上着とスカートの組み合わせなどを教えてくれるのも、楽しみのひとつである。ただ、買う積もりはないので、「ご免なさい」と心でつぶやいている。

姉は生地に合わせてデザインを決め、型紙を起こ

し、裁断し、仮縫いをする。そして、たいていはわたしの家に仮縫いの調整をしに来てくれる。ときには仮縫いが二度になり、わたしが姉の家へ泊まりに行くこともある。若いときはそんなとき徹夜でおしやべりもしたが、さすがにこのごろではそれはできなくなつたが、もちろんこれも二人の楽しみである。

仕立て上がりを着るうれしさ…!

いったいいつ頃から姉がわたしの洋服を作り始めたかというとき、姉が小学校6年生のときで、家庭科の時間にはわたしのブラウスを縫ってくれたのである。化繊ではあったが、ジョーゼット風の、白地に朱い熊の模様だった。わたしには多少の識別はできたが、模様形までは分からず、ただ朱と白の色分けだけはわかった。このブラウスと、近所の、わたしを特別にかわいがってくれたおばさんからいただいた、白いスカートは、わたしの最高のお気に入り、誰彼にとなく、「これはお姉ちゃんが縫ってくれたブラウスなの」と自慢していた。

あれから60年、ずっと姉に頼り切ってきた。これまでの洋服のすべての端切れを取っておけばよかつたと思っている。中にはオーバーも、夏のコートもある。

どの洋服にも思い出は染みこんでいる。これら全ての端切れを見るだけで、姉とわたしの人生絵巻が綴ら

れるだろう。あの姪の結婚式、友人の結婚式、わたし自身の結婚式、どこそこへの旅行、あの日の音楽会、もう現実には遠に陰も形もなくなってしまった洋服たちの一枚一枚にも、思い出は一杯詰まっている。せめて端切れだけでも残してあったら、楽しいことも、悲しいことも、その断片から、もしかしたら忘れかけた「なにか」をその服の襷のどこかに残してきたことを思い出すこともあるかもしれない。

姉がこれまで縫ってくれたこれらの洋服は、まったく本当に、ほんとうに、「世界に一つ」しかないものばかりである。

ふと思えば、わたしにはほかにも「世界に一つだけ」のものがたくさんある。たとえばお手製のセーターやカーディガン、ハンドバッグ、たくさんのかわいらしい袋物、象牙の根付け、わたしには縁遠いものと思われるもののようにだけれど、とても大切な方が書いてくださった、自筆の書(聖句)なども、「ただひとつのもの」なのである。

これらの人々に、わたしはどれだけ沢山の、心と現実の贅沢をさせていたかということ、つくづくと考えている。そして改めて感謝している今日このごろである。

2012年5月30日 水曜

東京漢点字学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成24年度 第1回(第59回) 報告

- 1 日時 平成24年4月21日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 周知事項

次回学習会日程 平成24年6月16日(土)

18時30分～(5月休み)

機関誌『うか』第91号配布

5 学習会内容

使用教材 漢点字講習用テキスト 初級編第五回

6 基本文字 (4)

2. 漢数字(二)

A 前回の復習

(5) 「戊^{三三三}」 戊は「ほこがまえ、ほこづく

り” 或・域・闕・戒・戦・戎・成・我・戚・咸”など多くの字に含まれる。「蔑」は「二重ほこ」。読みはセン、サン。「浅」は「浅」の旧字体。「盞・箋・



賤・棧・殘」などがある。「或」↓「惑・國」。

「成」↓「城・盛」。「咸」↓「感・緘・減・鍼」。

類似した「弋」は「しきがまえ」。読みは「ヨク、イ

キ」。「式・弋・式・貳・代」などに含まれる。

「代」↓「伐↓閔・筏」。

(8) 「辛」十(ロ)と立(マ)であらわ

す。「立」は正面から見た人が立っている形。「十」

は針を表わす。刺青を彫る道具(針)、この場合の

「立」の形は、「針の柄」。味の「五味」とは甘・酸

・鹹(かん…塩からい)・苦(にがい)・辛(から

い)

イ 今回の学習

(9) 「壬」漢数符5・6の点とニ(1・

2・3の点)で表す。音読みのジンは漢音。熟語は

「壬申(じんしん)」「壬生(みぶ)」「壬生菜(み

ぶな…京都壬生原産の水菜)」「壬生艾(みぶよもぎ

…ヨーロッパ原産の薬用植物。ドイツから輸入し京都

の壬生で試植した)」。人名や地名・寺社名にある。

「壬生忠岑(みぶのただみね…平安前期の歌人)」「壬

生寺」など。パーツとして多くの文字に含まれる。

「任」…責任・委任・任命・担任など多数。↓「荏」

・「賃」。「妊」…妊娠・妊婦・懐妊など。「廷」…

朝廷・廷吏。↓「庭」。

(10) 「癸」漢数符5・6の点とス(1・

4・5・6の点)で表す。音読みのキは漢・呉音。木

を組み合わせて台にした形。葵(あおい)揆(き)な

ど他の部首と組み合わせて使われる。

7 複合文字 (3)

* 「発音文字」をパーツとして含む文字。

※ 「生(セ・1・2・4・5・6の点とイ・1・

2の点)をパーツとして含む文字一つ。

(1) 「星」日(2・3・6の点)と生

(イ・1・2の点)で表す。字式は日/生。音読みの

セイは漢音、シヨウは呉音。元は「晶/生」。熟語に

「巨星」「星座」「凶星」「目星」「新星」「占星」

「星霜」「軍星(いくさぼし…北斗七星)」「天満

星(あまみつほし…天に一面にある星)」「雨夜の星

(あまよのほし…極めてまれにしか見られない)」「

「星影」「星屑」「海星(ひとで)」「星見草(菊の

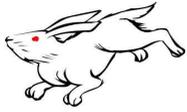
別称)」。作家に「室生犀星」。

漢文のペリジ

田^ニ 中^ニ 宋^ニ 守^ル 株^ヲ
 株^ニ 折^{リテ} 頸^ヲ 而^{シテ} 死^ス 因^{リテ} 積^テ
 其^ノ 耒^ヲ 而^{シテ} 守^ル 株^ヲ 冀^フ 復^ス
 得^レ 兔^ヲ 兔^ハ 不^{シテ} 可^{カラ} 復^ス 得^レ
 而^{シテ} 身^ハ 為^ル 宋^ノ 国^ノ 笑^{ヒト} 得^レ
 今^{スル} 欲^ス 以^テ 先^ニ 王^ノ 之^ヲ 政^ヲ
 治^メ 当^ト 世^ノ 之^ヲ 民^ヲ 皆^ク 守^ル
 株^ノ 之^ヲ 類^也。

（『韓非子』五蠹篇より）

「参照図書 渡辺精一（祥伝社）
朗読してみたい中国古典の名文」



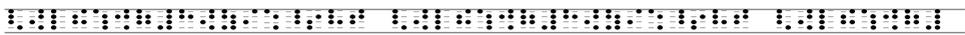
株を守る

宋^{そう}人^{ひと}に田^{でん}を耕^{かう}す者^{もの}有^あり。田^{でん}中^{ちゆう}に株^{くわ}有^あり、
 兔^う走^{そう}りて株^{くわ}に触^ふれ、頸^{くび}を折^ひりて死^しす。
 因^よりて其^{その}耒^{すき}を積^すてて株^{くわ}を守^{まも}り、復^{また}た
 兔^うを得^えんことを冀^{ねが}う。兔^うは復^{また}た得^え可^べか
 らずして、身^{その}は宋^{そう}国^{こく}の笑^{わら}いと為^なる。今^{いま}
 先^ま王^{おう}の政^{せい}を以^もて、当^{たう}世^{せい}の民^{たみ}を治^ちめ
 と欲^ほするは、皆^{みな}株^{くわ}を守^{まも}るの類^{るい}なり。

「守株」 「守株待兔」の諺や成句の出典であり、
 童謡「待ちぼうけ」のもとにもなっている。

『韓非子』は中国戦国時代の韓非の著書。

韓非（紀元前280?~233年）は戦国
 時代の国の一つである韓の国の人で、韓非子
 とも呼ばれる。自国の危機を憂う韓非は、昔
 のままのやり方で今の世の中の民を統治しよ
 うとするのは、切り株の見張りをする類であ
 るとして、古の聖人の行ったような徳治を
 行うべきという儒家の主張を批判した。



守 株

宋 人 ニ 有 リ 耕 ス 田 ヲ 者 。
 田 中 ニ 有 リ 株 、 兔 走 リ テ 触 レ
 株 ニ 、 折 リ テ 頸 ヲ 而 死 ス 。 因
 リ テ 釈 テ 其 ノ 未 ヲ 而 守 リ
 株 ヲ 、 糞 フ 復 得 シ コ ト ヲ
 兔 ヲ 。 兔 ハ 不 シ テ 可 カ ラ 復
 得 、 而 身 ハ 為 ル 宋 国 ノ 笑 ヒ
 ト 。 今 欲 ス ル ハ 以 テ 先 王 ノ 政
 ヲ 、 治 メ ン ト 当 世 ノ 民 ヲ 、 皆
 守 ル 株 ヲ 之 類 也 。

待ちぼうけ

北原白秋 作詞
山田耕筈 作曲



待ちぼうけ 待ちぼうけ
 ある日 せつせと 野良かせぎ
 そこへ 兔が飛んで出て
 ころり ころげた 木のねっこ
 待ちぼうけ 待ちぼうけ
 しめた これから寝て待とか
 待てば獲ものは 駆けて来る
 兔ぶつかれ 木のねっこ
 待ちぼうけ 待ちぼうけ
 昨日 鋏ぐわとり 畑仕事
 今日 頬づえ 日向ぼこ
 うまい 伐(き)り 株 木のねっこ
 待ちぼうけ 待ちぼうけ
 今日 今日 待ちぼうけ
 明日 明日 森のそと
 兔 待ち 木のねっこ
 待ちぼうけ 待ちぼうけ
 もとは 涼しい 黍畑(きびたけ)
 いまは 荒野の 箒草(ほうきぐさ)
 寒い 北風 木のねっこ



「人^亻偏」の右側に「可^可」が置かれた形の文字です。元は、人が荷を担いだ形を象った文字でしたが、現在では旁に「可^可」を用いています。漢文訓読では“なんぞ”と、疑問や反問の助詞として読まれますが、我が国の口語文の“なに”も、代名詞として、疑問詞として、広く用いられます。漢点字では、「^亻（人偏）」と「^可（可^可）」で表されます。

「何故（なぜ）」「何処（どこ・いずこ）」「何らか」「幾何学（きかがく、数学の一分野）」

(33) 荷^荷 カ に

「草^艹冠」の下に「何^何」が置かれた形の文字です。元は、人が荷を担いだ形を象っていましたが、上の部分が草冠になりました。訓の“に”は、荷物、荷台、初荷、船荷と読まれます。また、茎や花の形から、水生植物の“はす”の意味にも用いられます。漢点字では、「^艹（草冠）」と「^何（何^何）」で表されます。

「荷物」「荷車」「荷台」「荷造り」「荷主」「初荷」「船荷」「薄荷（はっか）」

・「奇^奇」とそれを部首として含む文字一つ。

(34) 奇^奇 キ く - しくも

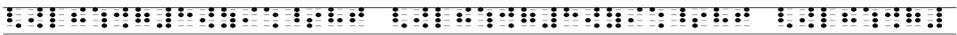
「大^大」の下に「可^可」が置かれた形の文字です。辞書の〈字統〉によれば、曲がった刀を振って、神様に祈る形を表すとあります。尋常でない、切羽詰まったときの祈りです。“くしくも”と読んで、不思議にも、怪しくもの意味を表し、“キ”の音を頭に付けて、普通でない、人知を超えたという意味の熟語を表します。「奇数」は、二で割り切れない数のことです。漢点字では、「^大（大^大）」と「^奇（可^可）」で表されます。

「奇異」「奇抜」「奇っ怪な」「奇矯な振る舞い」「奇を衒う」

(35) 寄^寄 キ よ - る よ - せる

「ウ^ウ冠」の下に「奇^奇」が置かれた形の文字です。“よる、よせる”と読んで、人が寄り集まる、寄り添って庇い合うという意味を表します。下って、何かの目的で一時的に寄り合って寝起きをともにする、宿を借りて世話になる、物や金銭を贈るなどの意味に用いられるようになりました。漢点字では、「^ウ（ウ冠）」と「^奇（奇^奇）」で表されます。

「寄宿舎」「寄食」「寄付金」「寄り合い」「寄せ算」「寄せ書き」「寄せ鍋」



漢点字講習用テキスト

初級編 第三十二回

5 複合文字 (2)

2. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (2)

前節に続けて、〈第一基本文字〉と〈比較文字〉が部首として構成される文字をご紹介します。

※ 「可[㇀]𠃉[㇀]」を部首として含む文字六つ。

(30) 阿[㇀]𠃉[㇀] ア おもね-る

「こざと偏」の右側に「可[㇀]𠃉[㇀]」が置かれた形の文字です。小高い丘の意とともに、曲がったところ、山間の谷川の曲がりくねったところ、クマを意味します。その曲がりくねる意から、「おもねる」という訓が生じました。真理を曲げて人に追従する、人の意を迎えて、それにこびへつらうという意味を表します。また「ア」は、梵語の最初の音で、「阿吽」とは、世界の始まりと終息、つまり宇宙万物の意味を表しています。地名・人名に、多く用いられる文字です。漢点字では、「𠃉[㇀] (こざと偏)」と「𠃉[㇀] (可[㇀]𠃉[㇀])」で表されます。

「阿蘇山」「阿部さん」「曲学阿世」「阿吽の呼吸」

* 「曲学阿世」、真理を曲げて、権力者におもねる意。

(31) 河[㇀]𠃉[㇀] カ ガ かわ

「さんずい」の右側に「可[㇀]𠃉[㇀]」を置いた形の文字です。旁は、元は蛇行する川の形を象ったものでしたが、現在では、「可[㇀]𠃉[㇀]」で表しています。曲がりくねった大河、中国では、黄河を指します。「かわ」の文字にはもう一つ、「川」がありますが、後にご紹介します。また「江」の字も「かわ」の意味ですが、揚子江のことで、これも後にご紹介します。漢点字では、「𠃉[㇀] (さんずい)」と「𠃉[㇀] (可[㇀]𠃉[㇀])」で表されます。

「河川」「河岸段丘」「黄河」「銀河」「運河」「河原左大臣 (かわらのさだいじん)」

* 「河岸段丘」は、大きな川の岸に土砂が堆積して段状にできる丘のことです。「銀河」は、「天の川」。「河原左大臣」は、源融 (みなもとのとおる)、小倉百人一首に歌が取られています。

・「何[㇀]𠃉[㇀]」とそれを部首として含む文字一つ。

(32) 何[㇀]𠃉[㇀] カ なに なん な いず-れ

「報告とご案内」

一 訂正とお詫び

前号では、幾つかの誤記がございました。お詫びして訂正させていただきます。

①「ご報告」の中の賛助会員のご芳名に、お一人のお名前を書き漏らしました。

高橋カズ様

謹んでお詫びし、御礼申し上げます。

②「東京漢点字羽化の会定例会報告」（木村多恵子）の、定例会並びに学習会の日程の、「2011年」とありますのは、「2012年」の誤りです。

③「羽化の会の活動に参加して」（著者は杉田ひろみさん）の最終行、「微力ながら頑張つてまいります。」の最後の4文字が失われておりました。

④「後記」（木下和久）の、「1967年」は「1997年」の、「1966年」は「1996年」の誤りです。

訂正させていただきます。

二 会員募集講座と漢点字学習会

①東京漢点字羽化の会では、五、六月にかけて、会



員の募集のための講座を開催しました。

新聞紙上での募集が事実上できなくなりましただけで、主にNHKボランティアネットのHPにお願いして広告しました。

他のメディアへのアプローチも必要かと感じております。

②毎年募集しておりますが、今年度も漢点字の学習者を募集致しました。

横浜と東京の、二つの会場で漢点字の学習会を開催しております。常時募集しております。お気軽に足をお運び下さい。

お待ち申し上げます。

三 現在進行中の漢点字記

①横浜漢点字羽化の会で

『万葉集』（伊藤博監修）、現在第一巻に着手しております。冒頭の雄略天皇の歌。

天皇の御製歌

一 籠もよ み籠持ち * 掘串もよ み掘串持ち

この岡に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね *

そらみつ * 大和の国は おしなべて 我れこそ居

れ しきなべて 我れこそ居れ 我れこそば 告らめ

家をも名をも

、こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち
このをかになつますこ いへのらせ なのらさね
そらみつ やまとのくには おしなべて われこそを
れしきなべて われこそを われこそば のらめ
いへをもなをも

【原文】

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳
尔 菜採須兒 家告閑 名告沙根 虚見津 山跡乃國
者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座 我
許背齒 告目 家呼毛名雄母

②東京漢点字羽化の会で

『岩波古語辞典』（大野晋監修）に着手しておりま
す。現在「あ」「吾、我」から「あぎと」「顎、腮」
まで完成しています。

「あ」「吾・我」 (一) (代) (一人)
称) わたし。あたし。「汝(な)こそは男(を)に
いませば……はもよ女(め)にしあれば」(記歌謡
五)。「独りや寝(ぬ)らむーを待ちかねて」(万
三五六二 東歌) * アは、すでに奈良時代から類
義語ワ(我)よりも例が少なく、用法も狭い。平安時
代になると、「あが」という形のいくつかを残すだけ

で、アは主格や目的格などの場合には使われない。ア
とワとは、「あが衣(ころも)」「わが衣(きぬ)」「
などと、似た対象についても使ったが、アは、多くの
場合「あが君」「あが主(ぬし)」など親密感を示し
たい相手に対して使い、ワは「わが大君」「わが父
母」など改まった気持で向う相手に対して用いた。

(二) (接頭) 相手を親しんで呼ぶ時に冠する
語。転じて、軽蔑の意も表わす。「一僧は術なき者か
な」(雑談集 七)

「あぎと」「顎・腮」 (顎(あぎ) 門(と))

の意) ① 下あご。「首を搔き切つて、ーを喉

(のんど)へ貫き、取っ付けに付けて馳せて行く」

(太平記 二九・師直以下被誅) ② 魚のえら。

「草刈鎌といふものを持ちて、(魚ノ)ーを搔き切り

て」(宇治拾遺 一六八)。「鰓、阿木止(あぎ

と)、魚頬也」(和名抄) ーに懸・く (恐ろし

い魚や獣に) 食わせる。餌食(えじき)にする。「海

底に沈まん事を痛まらずして、屍(かばね)を鯨鯢(け

いげい)のー・く」(平家 一一・腰越)

以上が現在の進捗情況です。

編集後記

▼最近の光通信を含めたIT技術の発達には目を見張るものがありますが、日頃愛用している電話についても例外ではありません▼私はだいぶ以前、まだ光通信が一般的になってそれほど間がない頃、NTTの光通信、フレッツ光を導入しました。これで電話料金が安くなり、インターネットも快適に利用できるということ、それなりに満足していましたが、しばらく経ってKDDIが光通信を勧めてきて、NTTより安いから是非にということ、半ば強引に切り替えを勧められました。確かに、料金は少々安く、実際のところ使用上の問題は全然起こりませんでした。それからまた何年か経ち、今度はNTTが巻き返しを図ってきました。これもまたかなり強引に、NTTに切り替えれば料金が安くなるというのです。ここへ来てKDDIに義理立てすることもなからうかと、NTTに切り替えることにしました。まだ、実際の工事に入っていないので、何か問題が発生するかどうかは分かりませんが、とにかく競争社会の厳しさ、その結果消費者にとって経済的な利益がかなりのものになるといふ実例を、身をもって体験したという次第です▼それにしてもこの、ひかり電話というのは大したものですね。従来の加入電話では遠くへ市外通話すると、料金は市内通話の10倍ほどになります、ひかり電話（一般のIP電話でも）は全国一律、3分間8・4円、アメリカにかけてもほぼ同じ料金だというのだから昔だったら考えられない料金革命ということになります。

（木下 和久）

（有）横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL（岡田健嗣）： okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://www.ukanokai-web.jp/

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は8月15日です。

※本誌（活字版・DAISY版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。